

榎木伸明 著

『声色つかいの詩人たち』



文学テキストは、多かれ少なかれ、つねに先行する文学テキストからなんらかの影響を受けている。あるテキストが既存のテキストに目配せする所作を、哲学者ジュリア・クリステヴァは「間テキスト性」と呼んだが、古典文学の巧みな語りなおし、歌いなおしをもくろんだ現代詩人たちを扱った本書では、あえてその概念を禁欲するかのように、「間テキスト性」という言葉は一度も使われていない。『声色つかいの詩人たち』、その魅力的な書名からしても、「間テキスト性」と名づけただけでなにがしかの解釈をしたように居直る批評への、幾分の風刺を含んだ異議申し立てのようにも感じられるが、深読みだろうか。

「声色つかい」とは何か。声色つかいとは、そもそも著名人のせりふや声色をまねる芸を指すようであるが、榎木氏は「こ

の芸の妙味は、聴衆にネタ元をわからせておいて、それを無断で「専有」してしまうところにある」と指摘する。ソポクレスやダンテを「自作の磁場へと引き寄せる」シェイマス・ヒーニー、『変身物語』の一話である「アスカラポス」に「現代北アイルランドにおける宗派間対立を重ね焼きなおす」キアラン・カーソン、『イリアス』を「ローカライズ」して現代北アイルランドの現実を描写するマイケル・ロングリー。著者は、現代アイルランド詩の担い手であるこれらの詩人たちの作品に共通してうかがえる詩的力学を鋭く読み解き、かれら詩人をいわゆる「声色つかい」の詩人たちと名づけ、「相手と敵対するかわりに相手のふところへ飛び込んで、相手の声の一部になります。「声色つかい」がやってみせるのは、価値の転倒というよりも一種のすりかえである」と詩人たちの詩学を喝破する。

本書を読み進める読者は、さらに、アイルランドの詩人たちに加え、「声色つかい」の詩人の系譜は、西インド諸島出身のデレク・ウォルコット、日本の現代詩人である伊藤比呂美、四元康祐、あるいは中国の現代詩人である田原^{テイエンユアン}など、その裾野がじつに広いことに気づかされる。われわれは、ウォルコットがいかにか「研究を経由せずじかにホメロスに接近」し長編詩『オメロス』を生むにいたったかという創作のエッセンスに触れるのであり、また、伊藤比呂美の『河原荒草』を論じた場面においては、「伊藤がオウィディウスを読んだかどうか詮索することにあまり意味があると思えない。というのも、彼女はオウィディウスの影響を受けているというより、オウィディウスと根を共有したひと株から株分けされた詩人であると言ったほうが、現実に近いと思われるからだ」といったスリリングな解釈に接するのである。「先人たちの詩を〈消費〉するのではな

く〈経験〉する」ことで詩作する四元康祐、「中国的な様式の残り香をかすかに漂わせる」日本語で詩をなす田原^{テイエンユアン}など、「間テクスト性」あるいは影響という言葉さえも陳腐であるかのように感じられるほど、『声色つかいの詩人たち』では、古典文学と現代詩の共振が、選び抜かれた言葉を通して豊かに表現されている。

本書の最終部では、著者がここ数年『現代詩手帖』に掲載した、白石かずこ、辻征夫、佐々木幹郎など、日本の現代詩人が発表した作品の書評が収められている。ここでも、安易な一般化は避けられ、結論を出すことを先延ばしにしながら、作品にうかがえる具体的な詩行とその響きが文章にまとめられ、その倍音が巧みに論じられている。想像力を刺激するすぐれたアナロジーの精神が詰まった本書は、一般に難解とみなされることの多い現代詩の本格的な手引書といえよう。現代詩とじっくりと向き合う機会を渴望するわれわれ読者には、まさに干天の慈雨ともいふべき書である。(みすず書房、2010年4月、四六判286頁、3,200円)

——北 文美子（法政大学教授）